

伊 計 島 の 遺 跡

知 念 勇

はじめに

伊計島から採集された石器が三宅宗悦によって昭和10年雑誌「ドルメン」第四巻第六号に紹介されたのが、伊計島における考古学上の記録でははじめてのものである。^(注1)

三宅論文には、伊計小学校の山城永秀によって採集された三個の石斧が紹介されて

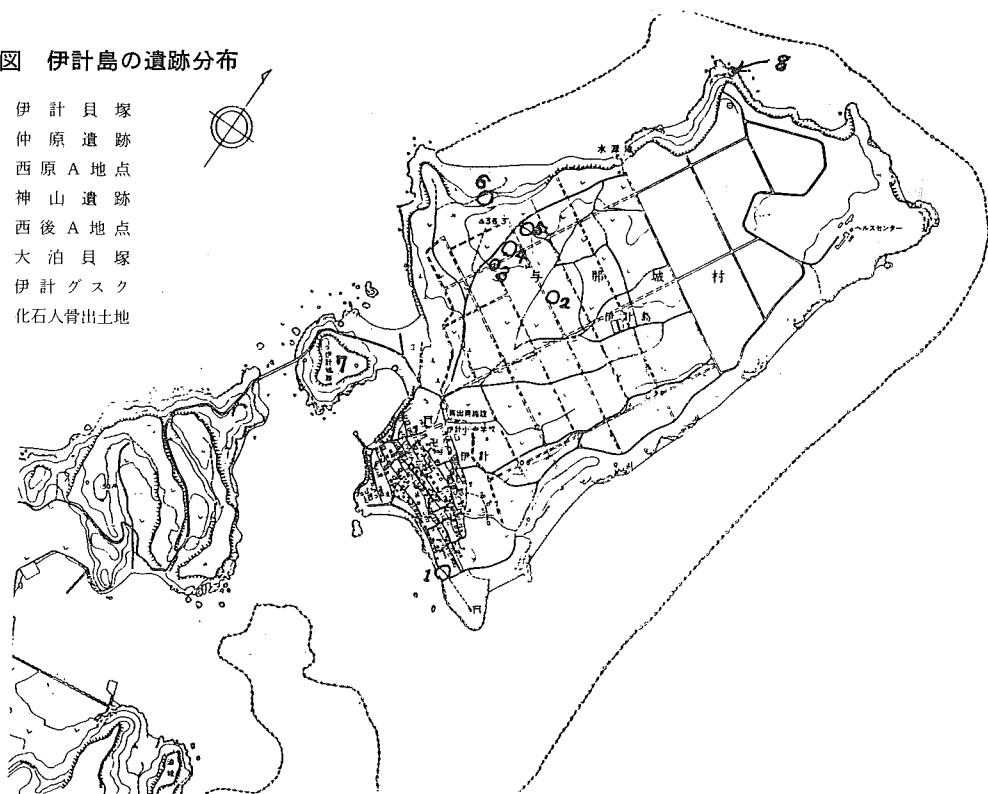
いるが採集された遺跡名は不明である。

その後十数年この島の考古学上の調査や記録はない。戦後いち早く多和田真淳によって、伊計島の考古学調査がなされ伊計神山遺跡と伊計城跡が紹介された。^(注2)

さらに1978年8月の沖縄大学学生文化協会による伊計島調査によって、新たに伊計貝塚・仲原遺跡・大泊貝塚が発見された他

第1図 伊計島の遺跡分布

- 1. 伊計貝塚
- 2. 仲原遺跡
- 3. 西原A地点
- 4. 神山遺跡
- 5. 西後A地点
- 6. 大泊貝塚
- 7. 伊計グスク
- 8. 化石人骨出土地



(★ちねん いさむ 沖縄県立博物館教育普及課長)

神山御嶽の北側を西原A地点、南側を西後A地点の2遺跡にわけている。この調査によって、伊計島の遺跡は7カ所となった。^(注3)

1979年6月から7月にかけて、仲原遺跡と神山遺跡が沖縄県教育庁文化課によって、52日間にまたがって発掘調査された。この調査が現在に至までの唯一の正式な発掘調査となっている。以下各遺跡について概観したあと今回は特に、伊計城跡について述べてみたい。

1. 伊計貝塚

伊計部落の南端の海岸ぞいの屋敷と道路から海岸砂丘地に形成された沖縄編年前期から後期に属する遺跡である。前述したように1978年沖縄大学学生文化協会によって発見された。遺跡が発見された当時は土器が多く採集されたようであるが、現在は遺物の採集は不可能に近い。

当時の採集遺物をみると、口縁部が外反する後期系の無文甕形土器が主体を占めるが有文土器の中には、鞍状の凸帯文とアカジャンガー系の深い曲線文がみられる。

その他前期土器としては、嘉徳I式系の古いタイプの土器もみられることから、本貝塚は長期にまたがって、人間の生活のあったことがわかる。

2. 仲原遺跡

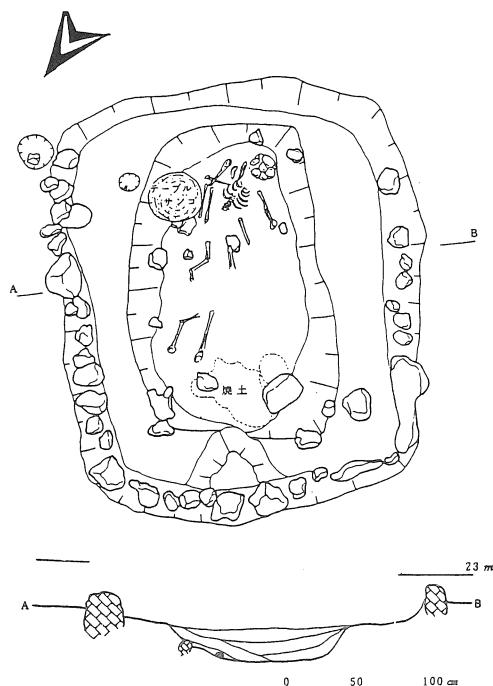
1978年8月沖縄学生文化協会の調査の際発見された前V期の遺跡である。



仲原遺跡現況

本遺跡は、神山御嶽遺跡の東南約150mの畠地帯の石灰岩台地に立地する。この遺跡は島の中央部から西南よりの標高25m東西約200mの南北約100mの広範囲にまたがっている。

本遺跡は、1979年6月から7月まで農地基盤整備に伴う発掘調査が沖縄県沖縄教育庁文化課によって実施された。



第2図 第1号住居址内の屋内拡墓
注4より

本遺跡の一帯は現在は耕作されずに休耕地となっているところであるが土地の耕土深度は深かったようである。したがって従来の耕作方法では、耕作面が浅かったせいもあって地下遺構の保存は良好な状態で発見されたようである。

発掘面積は 2×2 の52グリット $208 m^2$ である。その結果、拳大から人頭大の石灰岩塊で縁どりされた石組状竪穴住居址が11基と屋内墓1基が発掘された。その発掘調査(注4)概報からまとめると次のようになる。

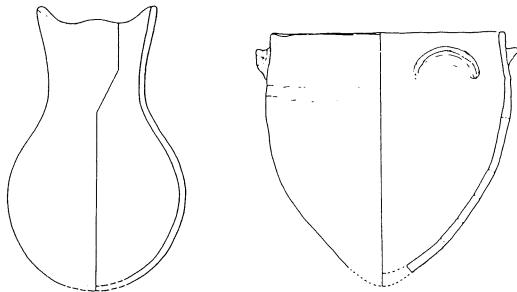
竪穴住居の大きさは、 $3 \sim 4 m$ の間隔をおいて隣接するものやおたがいに切り合い関係にあるものなど各遺構とも保存状態は良好であると言われる。沖縄編年中期（高宮編年前第V期）に属する。

層位は、第Ⅰ層は表土搅乱層・第Ⅱ層は茶褐色の固い層・第Ⅲ層が黒褐色土層で遺物包含層（生活層）・第Ⅳ層が基盤のマジ層となっている。したがって遺物を包含する層は第Ⅲ層である。

出土遺物は人工遺物と自然遺物とに分けられる。後者には、獣魚骨と人骨がある。

人工遺物には貝製品（イモガイ製の小玉）骨製品（サメ歯状垂飾品・骨針など）石器（石斧・磨石・凹石など）と多くの土器が出土している。

土器は、大型壺・ミニチュア壺・鉢などがある。これらのうち深鉢形で口縁部が微弱な外反を呈し頸部が張る尖底または丸底となる土器と長首で胴部が球形をなす薄手の壺形の土器を「仲原式土器」と設定された。(注5)



第3図 仲原式土器（深鉢・壺形）
注5より

遺構は11基あり、第1号は $2.40 m \times 3.00 m$ で隅丸方形のものから $3 m \times 4.5 m$ （第7号）までの規模のものがある。第1号住居址内中央に土拵があり、住居の床面を掘込んで人骨が埋葬されていた。

本遺跡は昭和61年8月国の史跡に指定された。

3. 神山遺跡



神山遺跡現況

伊計部落北西約 $150 m$ の地点にある。西海岸まわりの一一周道路から東へ約 $5 m$ ほど入ったこんもりとした雑木林（御嶽林）の $90 m \times 80 m$ の森が神山御嶽遺跡である。

御嶽内は、伝承によると伊計部落の旧村落であったとされるところである。内部は

石灰岩が露出し、中心部にイビがまつられている、現在も部落の信仰の対象として拝まれている。

本御嶽の北方約500mの海岸には犬名川と呼ばれる泉があり、現在も部落に送水されている。沖縄大学学生文化協会の表面調査によって、土器、須恵器、白磁、青磁、染付・黒曜石片などが採集されている。

1981年6月、教育庁文化課によって発掘調査が行われた神山御嶽は圃場整備の対象からは除外されたため、御嶽周辺の試掘調査が行われている。

その結果、表土層は10cmしかなく、遺物包含層は殆どなかったようである。しかし建物の柱跡とみられる遺構が発見されている。柱の直径最小30cm最大34cm深さは9~14cmである。楔石の入った柱跡も発見されているが全体プランは不明である。

出土遺物は石器（石斧・磨石・凹石・叩き石等）須恵器（壺形）青磁（碗）・陶器などである。出土遺物からみてグスク時代の遺跡であるとみられる。

多和田氏は「この遺跡は表面調査の結果からすれば、住居址とおもわれる」として^(注6)いる。

4. 西原A地点遺物散布地

沖縄学生文化協会によって発見された遺物散布地である。神山御嶽遺跡の南に広がる地域にグスク系土器と須恵器が発見されるが量的には少ない。

5. 西後A地点遺物散布地

西原A地点同様、沖縄学生文化協会によって発見命名された。神山御嶽遺跡の北側に隣接する。グスク時代の土器や須恵器の他玉口縁の白磁などが発見されている。いずれもグスク時代に属する遺物散布地であり、同一遺跡である可能性がある。

6. 伊計グスク



伊計グスク内拝所

島の南西端に位置する琉球石灰岩からなる台地に立地する。この台地は宮城島と伊計島のほぼ中間に位置する島であったが、現在は伊計大橋が懸けられたのにともなって、伊計グスクの北側が埋め立てられて伊計ビーチとなっただため、地続きになっている。

伊計グスクに関わる次のようなおもろがある。

船出のおもろ

あさどりがなりば

やくのカミズーや

とりかじやととり

わがおもろとまり
ひちよせてたばれ
朝なぎになって、船頭役のカミズーが、船
かじをとて、わが思い泊まりを渡ってい
きます、どうか伊計城の神様、無事にひき
よせて下さい。という意味であろう。
このおもろからわかるように、伊計グスク
へは船で渡ったことがわかる。

伊計グスクは俗に「イチーグスク」とよ
ばれている。現在の伊計島では最高所で、
標高約50mある。

伝承によると「昔、伊計城にアタへ筑登
之という武士（接司）が居城していたがそ
のころ、その南がわ対岸の宮城島に泊グス
クには「川端イッパー」という大そう強い
接司がいた。アタへ筑登之と川端イッパー
は、何かと事あるごとに相争い、たがいに
相手の領域をねらっていたようであるが、
なかなか決着がつかなかった。ところがア
タへ筑登之は一計を案じた、ある寒い冬の
北風の強い日に、部下たちに島じゅうの家
から木灰を集めさせ、この木灰を風下に投
げ散らせたら、木灰は煙のように舞い上が
り宮城島の住民をはじめ、泊城内の武士た
ちは木灰が目に入り、物が見えなくなつて
右往左往しているうち、ここぞとばかりに
伊計城主のアタへ筑登之とその部下たちは
泊城内へ攻め入り、ついに宿敵川端イッパ
ー接司を攻め亡ぼしたという。」以上は、
新城徳祐氏の「沖縄の城跡」昭和57年8月
発行」に掲載されたものである。

伊計城跡がいつ頃誰によって築城された
かは、資料がなく判然としない。しかし

「泊グスク」は北山城の末裔にあたる志慶
真樽金が今帰仁城跡を追われて辿り着いて
築城したと伝わるところである。「伊計グ
スク」もほぼ同時期と推察される。

採集遺物を見てみよう、このグスクの採
集遺物には、多和田真淳氏による収集品が
当館に寄託されている。それとともに、今
回の調査によって得られた採集資料からみ
ることにしたい。

採集遺物には、青磁、白磁、陶器、土器
などがある。その中から中国陶磁器につい
てのべる。

第1図版1は灰白色をした青磁で、口径14
cmで直口の碗である。胎土は乳白色で黒い
粒が混入する。上釉は光沢があり寛入は見
られない。

同図版2は灰白色をした青磁で口径15cm口
縁部が外反する碗である。胎土は乳白色で
上釉は光沢があり寛入は見られない。

同図版3は灰白色（同図版1、2に比べると
白色）で、白磁に近い。口径16cmで口縁部
が直口の碗である。内面の口縁部直下1.5
cmの所に1本の圈線が回る。胎土は乳白色
で良質で上釉も光沢があって、寛入は見られ
ない。図版1、2、3は何れも口縁部碗の破
片である。

同図版4は淡緑色をした青磁である。口径
12.8cmの直口で後底で上げ底の皿である。
底部の中央部が露胎である他は全面
釉が掛けられている。胎土は灰白色で上釉
は光沢があって寛入は見られない。

同図版5濃緑色をした青磁酒会壺のフタ
である。外面には鎧蓮弁文が全面に施され

ている。内面外側から内側の一部は露胎である。胎土は灰白色で上釉が光沢があり寛入は見られない。内面の上釉は外面に比べると幾分明るい。

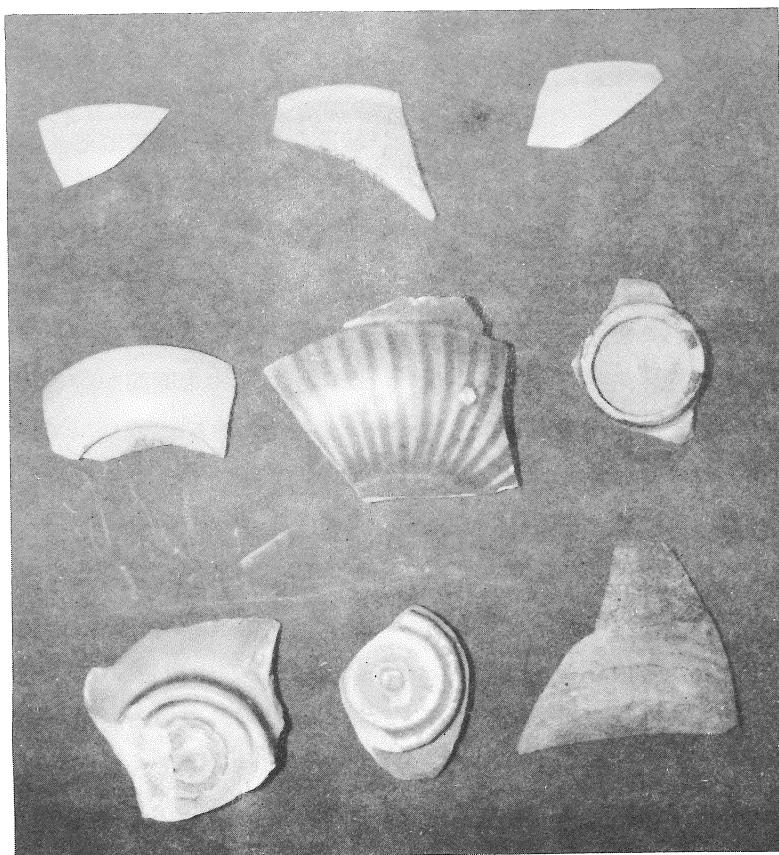
同図版6はオリーブ色の青磁碗の底部である。畳付けから内側は露胎である。胎土は暗い灰色をなす。上釉は薄く掛けられているが光沢はあり寛入は見られない。

同図版7は豆青色をした青磁碗の底部である。見込みには線彫りの花文が施されそれを取り囲むように圈線がめぐらされている。胎土は乳白色で良質上釉も2mmほどあり厚く掛けられ光沢を有し寛入も見られない。外底部に重焼きのくつき痕があり、その部

分が釉禿となっている。底径8cmである。

同図版8はダークグリーンをした青磁の碗底部である。底径6.8cm底面は中央部のへそ状の部分を除いて、露胎で重焼きの痕跡が認められる。底部内面以外はすべて上釉が施されている。外底面は赤褐色で胎土は白色内外面とも光沢は少なく、寛入もみられる。

同図版9は褐釉の陶器である。底部であるが同部の立ち上がりが外側へ急傾斜するので、胴部に膨らみをもつ壺が想定される。底部は円板状に作った後にくっつけられた痕が内外面に見られる。外面底部と内面は露胎である。外面は赤褐色で内面は灰色であ



伊計グスク採集の陶磁器

る。底径 13.4 cm である。

以上の遺物は、すべて多和田真淳氏によって採集されたものである。これとは別に今回の調査によって採集された出土遺物がある。中国陶磁については、時期、種類などからみて前述の多和田採集の範疇を越えるものはない。しかし、中国陶磁器以外にいわゆるくびれ平底土器も採集されている。遺物は主として、グスクの門に上がる東側の坂道付近に最も多く散布していた。それとその東側の海岸一帯にも中国陶磁器の散布がみられる。

これらの採集遺物から年代を推定すると中国陶磁器は14世紀の終末から15世紀の始めのもので占められ時期がほぼ限定されている。くびれ平底土器は東側の登り口付近で採集される。グスクの門へ登る傾斜面付近でこの土器は採集されたためこの斜面付近にこの土器の中心地がある可能性がある。

沖縄大学学生文化協会の報告によると、中国陶磁器が多く採集されており、その年代を13~15世紀に比定できると報告されているが現時点でもみると13世紀までさかのぼる。



伊計グスクの野面積石垣

グスクは独立した標高30~40 m琉球石灰岩からなる台地（伊計島で最高所）を野面積みの石垣で囲って築かれている。東側の坂道を登って行くと野面積みの石積みで囲われた郭がある。石積の幅0.5~1.0 mで、高さは現在 0.5~1.0 cm 残っている。内郭の長さは百 m 余幅 60 m 余ほどあり、広い。上って右側と左側に拝所がある。正月15日には、初ウマチーがあり、麦の穂を「いちぐすく」に供える。供えものは、五穀の外に、鮮魚の刺身などである。

伊計島の金城信雄氏の宅には、伊計按司が祀られている。信雄氏のお父さんがグスクに関する伝承者としてしられていたが10年程前に亡くなられた。したがって、息子の信雄氏にグスクに関する伝承についてきだしたが、断片的にしか伝わっていなかった。それでは、だれかそれらのことを知っているひとはいないかと尋ねてみたが、現在島に住んでいる人からは、前述の伝承は断片的にしか聞き取れなかった。急早にこれ等の伝承が消えつつあることがわかった。

琉球国由来記に出てくる伊計島の嶽は次の三箇所ある。

○セイジノ嶽、神名、ヨキキヨラノ御イベ、
麦稻四祭之時、仙香、シロマシ神酒臺完

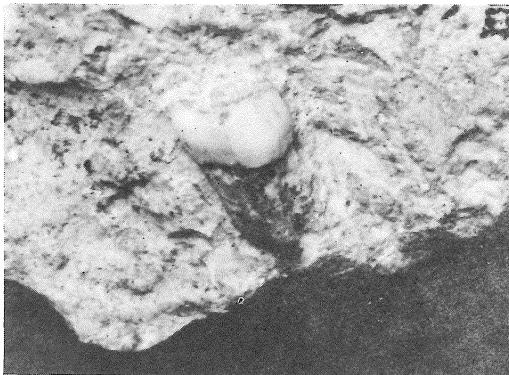
(芋。伊計村百姓中) 供之。伊計巫ニテ祭
祀也。

○アムキノ嶽、神名、キラノ御イベ

○城内之イベ、神名、タケキヨラノ御神、
右三ヶ所、伊計巫崇所。右十四ヶ所、三八
月、四度御物参、有祈難也。

7. 化石人骨の資料

この写真にみる資料は、1980年8月に、真謝喜一氏によって、伊計島北端の灯台付近の石灰岩から発見されたものである。本資料は、OK運輸に勤務している喜舎場朝



石灰岩に附着した化石人の歯

敬氏から当館に寄贈されたので今回紹介することにした。

この付近の石灰岩からはシカの化石が多数発見されておりこの歯もこれらの化石と一連のものとみられ、洪積世時代に層すると見られる。また東隣りのヘルスセンターの西側にあるギンシブ原洞窟からは、大量の(注7)シカ化石が出土することで知られており、これらはすべて、一連のものとみられる。

本資料は、石灰岩に付着して化石化した

人間の歯である。長崎大学医学部解剖学教室助教授の松下孝幸氏によると、この歯は人間の第一か第二臼歯で、10才前後の子供という同定を得た。今回は洪積世時代の人類化石の可能性のある新資料として紹介した。

- 注 1. 三宅宗悦「南東の石器時代に就いて」『ドルメン』第4巻第六号、昭和10年6月
- 注 2. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『琉球政府文化財要覧1956年度版』琉球政府文化財保護委員会、1956年
- 注 3. 「伊計島の遺跡と村落」『郷土第17号』沖縄大学学生文化協会1979年9月
- 注 4. 「伊計島の遺跡」神山遺跡 — 仲原遺跡範囲確認調査概報 - 沖縄県教育委員会1981年3月
- 注 5. 上原 静・当真嗣一「仲原式土器の提唱について」『紀要第1号』沖縄県教育庁文化課1984年3月
- 注 6. は注3に同じ
- 注 7. 大城逸朗・野原朝秀・長谷川善和「大型動物の化石分布と動物の渡来」『沖縄歴史地図考古』柏書房1983